

おわりに

21世紀はバイオの世紀、生命の世紀と言われ、バイオ分野の技術開発は激しい国際競争にさらされている。必然的にこの国際競争を勝ち抜くための優秀な人材の登用は盛んなはずであるにもかかわらず、今、バイオ系博士研究員（ポスドク）の就職難が社会的な問題になっている。一昔前に比べ、いったい何が変わったのであろうか。それは、博士1万人計画のもと、社会でのポスドクの受け入れ態勢が十分整備されないうちに、大学院の重点化や補助金の増額など表面的な政策が進んだため、ポスドクの需給バランスが大きく崩れたことがもっとも大きな原因であると考えている。博士進学者は当然多くなり、それぞれの価値観も多様化し、一部には質の低下を伴いながら多くのポスドクが就職もできず研究機関をさまよっている現状がある。これは、政策や社会的構造だけに起因する問題ではないと思う。優秀な人材であれば企業は採用するはずである。一方で、日本再生に必要な人材が不足している現実もあり、グローバルな視点を持った人材の育成を目的とした教育改革が進められている。アカデミアという限られた世界で求められていた「優秀な人材」と、現代社会が必要としている「優秀な人材」の定義に微妙な違いがあるのは確かであるが、ポスドクを含む理工系研究者に対する社会や企業の評価基準はそれほど大きく変わってはいないと思っている。その意味で、若手研究者自身もそれなりの覚悟と努力が必要であろう。

個々の優秀な若手研究者に持てる能力を遺憾なく発揮してもらうことは、科学技術に支えられた21世紀の社会に必須であり、彼らが研究に没頭できる環境整備の必要がある。優秀な人材の育成・確保は国益を守る上にも重要な政策であり、従来のシステムにとらわれることなく、それぞれが意識改革を図ることに加え、多様化したポスドクに対する社会への新たな取り込みシステムの構築を期待したい。

1年半続いた本連載は、好評のうちにひとまずの終了となるが、書き手にとっても読み手にとっても強い関心を持っていただけた連載であったと感じている。キャリアパスに関しては研究者それぞれに多様であり、就活のマニュアル本のようなものはないが、本連載が生物工学の将来を担う若手研究者の道標になれば幸いである。

生物工学会誌編集委員会委員長 木野 邦器